

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
 研究科名 大学院人間科学研究科
 申請者氏名 中村 駿
 学位の種類 博士（人間科学）
 論文題目（和文） 教師の学びにおける行為の中の省察に関する研究
 論文題目（英文） A Study of Reflection-in-action in Teacher Learning

公開審査会

実施年月日・時間 2019年12月11日・9:00-10:30

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 402教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・准教授	尾澤 重知	博士（知識科学）	北陸先端科学技術大学院大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	向後 千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	井上 典之	Ph.D.（教育心理学）	Columbia University	教育心理学
副査	早稲田大学・教授	三嶋 博之	博士（人間科学）	早稲田大学	実験心理学
副査	早稲田大学・教授	浅田 匡	修士（学術）	大阪大学	教育心理学

論文審査委員会は、中村駿氏による博士学位論文「教師の学びにおける行為の中の省察に関する研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について約30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：本論文の成果から、教師を変えるという観点でどのような示唆が得られるか。

例えば、熟練教師になるには単なる経験以上に何が必要になるか。

回答：本論文で提示した、行為の中の省察の生起を左右する授業認知の側面は、教師が学び続けるために必要なものであり、ひいては熟練教師になるための1つの要件になると考えている。

- 1.2 質問：インストラクショナルデザインでは教師の学びだけでなく、教師の変化と学習者との学習の関係が重要なので、その観点から今後の展望について聞きたい。
回答：例えば、研究3の授業は、研究協力の公開授業前のシミュレーションとして実施されている。机上授業後の公開授業は、ビデオカメラで記録したため、今後は机上授業による教師の変化と公開授業の学習成果との関連を検討したい。
- 1.3 質問：本論文の成果が、授業研究の生産性を高める上でどのように寄与するか。
回答：先行研究によれば、特に初任者教師は、授業経験から学ぶことの難しさが指摘されている。本論文で示した行為の中の省察を左右する授業認知の側面は、授業研究において初任者教師が公開授業をしたり、他者の授業を参観したりする上で支援の枠組みになると考えている。
- 1.4 質問：教師が行為の中の省察を生起させ、授業の中で学ぶことは重要であるが、そのマインドセットを支える教師の引き出しの多さ、例えば教授スキルがないと授業を改善できないのではないか。
回答：Schönが行為の中の省察におけるレパートリーの重要性を述べているように、教師の引き出しの多さは重要であると考え。実際に研究2で初任者教師は、行為の中の省察を生起させるものの、手立てが見つからずに従来通りの教授行動を繰り返していた。本研究では教師が行為の中の省察を生起させた後のプロセスに関しては分析対象にしていなかったため、今後の研究課題としたい。
- 1.5 質問：本論文は教師の知の問い直しにも関わるテーマであるが、例えば、ShulmanのPedagogical Content Knowledgeに対して研究結果から示唆できる点はあるか。
回答：研究3で、教師は、一般的な子どもの理解を問題にして行為の中の省察を生起させた場合もあるが、個々の子どもの特徴を考慮しながら行為の中の省察を生起させた場面も見られた。ShulmanのPCKでは、一般的な子どものつまづきや誤概念に関する教師の知識が注目されがちであるが、研究結果から個々の子どもに関する文脈固有の知識も、教師が授業実践や学びを展開させる上で問題になると考える。
- 1.6 コメント：本論文は非常にわかりやすくまとめられ、時間をかけた分の研究成果が出ている。本論文は、これからの教育研究の方向性について未来を垣間見せる研究であり、今後は海外ジャーナルに投稿することを期待する。
- 1.7 コメント：本論文は、Schönに基づき「環境を意味づける・結びつける」と記述するのに対して、Gibson派は「環境の中から意味を発見する」と記述する違いはあるものの、両者の考え方は非常に似ている。今後は知覚理論におけるEducation of attentionの知見も参照し、さらに研究を発展させることが望まれる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
- 2.1.1 先行研究の整理の後に、Schönのリフレクション概念に対する自身の解釈を示すことで論旨が明確になる。
- 2.1.2 研究1の該当者数の%を議論している図にサンプル数も表記するとよい。

- 2.1.3 本研究において、授業認知に応じて行為の中の省察が如何に左右されるかを説明した図を論文本体に加え、考察するとよい。
 - 2.1.4 総合考察において熟練教師になるには経験以上に何が重要であるのかを明示し、授業研究等でそれが生じるための条件について説明できるとよい。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
- 2.2.1 「2.1. Schönのリフレクション概念」の後に、Schönのリフレクション概念に対する自身の解釈を加筆した。
 - 2.2.2 「4.3. 結果と考察」の図4-3において、サンプル数を加筆した。
 - 2.2.3 「7.4. 学び続ける教師と行為の中の省察」に発表で使用した図を加え、授業認知に応じて行為の中の省察が如何に左右されるかを考察した。
 - 2.2.4 「7.4. 学び続ける教師と行為の中の省察」において、本研究の成果に基づき熟練教師になるための要件や授業研究への示唆を加筆した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、教師の授業認知を手がかりとして、行為の中の省察の特徴を探ることを目的としている。Schönのリフレクション概念に関する詳細なレビューに基づき、授業認知が行為の中の省察を左右する重要な要素であることを明確化している。また、近年の教師の省察研究によれば教師がリフレクションを生起させることができないという問題が指摘されており、本論文は、かかる問題を解決する上で明確かつ妥当なものであると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文の各研究は、Schönによる行為の中の省察のプロセスに対応させて、明確に構成されている。各研究の調査方法は、従来の授業認知研究における方法の限界を踏まえて考案され、分析では、解釈学的手法に基づきテキストデータを明示しながら考察され、行為の中の省察の特徴を探るためのアプローチとして妥当な方法論である。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、研究1を通して授業認知の特徴を明らかにし、研究2・研究3を通して授業認知の特徴によって行為の中の省察が左右されることを明確な成果として明らかにしている。具体的には、(1)注目する教室環境、(2)出来事の結びつけ、(3)児童同士の関連付け、の3側面の授業認知の違いによって行為の中の省察が生起するかどうかを左右されることを説明している。以上の知見は、先行研究と比較しても、教師が学ぶための要件や今後の省察研究に関する新たな示唆として妥当なものである。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 これまで授業過程における教師の行為の中の省察は、方法の難しさから十分に検討されてこなかった。本論文では、行為の中の省察にアプローチするために、先行研究の課題を踏まえて、研究倫理や実践性を配慮しながら調査方法が考案されている点で、独創的であると判断される。

- 3.4.2 授業過程における行為の中の省察の特徴について、教師の授業認知を手がかりにして実証的に記述した点で独創的であると判断される。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
- 3.5.1 教師の省察研究は多く行われてきたが、そのほとんどは行為についての省察を対象としたものであり、Schön の鍵概念である行為の中の省察は方法の難しさから解明されてこなかった。本研究より、行為の中の省察の生起を左右する授業認知の特徴が示された点で学術的な意義が高く、教師が学ぶための条件や方法を具体的に提案している点で社会的な意義があると考えられる。
- 3.5.2 本論文では Schön のリフレクション概念に関する文献を体系的にレビューし、概念的定義を整理した上で、行為の中の省察の特徴を明らかにした。先行研究においてリフレクション概念に対する解釈に混乱や誤解があることが指摘されてきたが、本論文を通してリフレクション概念の定義や、研究の意義が明確化された点で学術的な意義が高いと判断される。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 ヒトが如何に学ぶかは、人間科学における重要なテーマの1つである。本論文では、教師の学びにおける行為の中の省察の特徴について新たな知見を提示しており、人間科学に対して貢献していると考えられる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

中村駿，浅田匡：2017 写真スライド法による教師の授業認知に関する研究. 日本教育工学会論文誌， 40 卷 4 号, 241-251 頁

中村駿，浅田匡：2018 オン・ゴーイング法による授業認知に基づく授業者の行為の中の省察に関する研究. 日本教育工学会論文誌， 41 卷 4 号, 477-487 頁

中村駿，浅田匡：2018 Schön の省察概念による教師の省察研究の再検討. 人間科学研究 第 31 卷第 1 号, 3-12 頁

中村駿，浅田匡：2017 机上授業シミュレーションを用いた教師の行為の中の省察に関する事例研究， 日本教育工学会研究報告集, 17 卷 4 号, 37-44 頁

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上